

経営協議会学外委員からの指摘事項への対応について(令和5年度対応済み分)

	事項【意見抜粋】	本学の対応	対応室	指摘回	対応状況
1	<p>創立75+75周年に向けた基金の取組について</p> <p>【中小企業は、様々な方面から寄付を求められる。これなら寄付しようと思わせる具体的なイメージを提示してもらいたい。そうでないと、なかなか寄付には至らないと思う。例えば、「広島大学を世界TOP100大学へプロジェクト」の方が、イメージが湧きやすいと思う。】</p> <p>【遺贈寄付については、受入れの基準を作った方がよいと思う。】</p> <p>【やはり卒業生のバックボーンは大きい。企業は一時的な寄付はできるが、継続的な寄付は難しい。卒業生は愛着を持っているので、改めて卒業生に働きかけを行うのが良いと思う。】</p>	<p>躍動基金の募金にあたっては、基金趣意書とともに、より具体的な「広島大学の取組構想」を策定したうえで、広島県内の企業・団体の代表者と大学関係者で組織した「基金推進会」での対話を通して寄付機運を醸成しつつ、個別訪問にて丁寧な趣旨説明を行っている。</p> <p>また、寄付者が出来るだけ自身の希望に沿った基金を選べるよう、躍動基金のもとに、より用途を具体化した基金(冠事業基金、修学支援事業基金、部局基金等)を設置して、寄付種別を増やしている。</p> <p>大学に寄せられた遺贈寄付の相談には、パートナー契約を結ぶ金融機関や司法書士等を紹介しており、遺言書の作成や相続手続き、税金の扱いなどは専門家に委ねつつ、専門家と連携を図りながら共に寄付者をサポートしている。なお、遺贈寄付受入れの際は、「広島大学基金規則」、「広島大学寄附金取扱規則」又は「広島大学株式会社による寄附金取扱規則」に則り、所定の手続きを経て受け入れることになるが、特に不動産などの現物資産や株式を受け入れる際は、規定の委員会又は審査会での審議を経ることとしている。</p> <p>基金室では、卒業生のネットワーク構築を進めるとともにそれを活用した募金活動を行っている。また、募金のための様々な企画をウェブサイトやSNS等を通じて広く打ち出すことで、卒業生と大学との新たな繋がりがも生み出している。直近では、課外活動団体を応援するGiving Campaignや75+75周年のオリジナルデザインラッピング電車・バスを走らせるためのクラウドファンディングなど、卒業生の帰属意識や愛校心に働きかける募金企画を実施し、多くの寄付を集めることができた。例年、基金への寄付件数は、卒業生・保護者からの寄付が全体の5割以上を占めているほか、お礼や活動報告などきめ細やかな働きかけによるリピート寄付も増加している。</p>	基金室	第93回 (05.6.15)	(06.03.15報告)
2	<p>今後の広島大学における教育の方向性について～ChatGPT(生成AI)などの活用を見据えて～</p> <p>【生成AIは、未だ発展途上の技術である。広島大学には利用方針を常に見直し、学生が生成AIを使いこなせる教育を充実させると同時に、教員に対するFDも継続して行ってほしい。】</p> <p>【成績評価に当たり、ディスカッションを入れれば、考える力というのも見えるのではないか。】</p> <p>【生成AIの活用能力を身に付けることは大事だが、自ら考えて行動するという人間的な部分を教育レベルにおいてもしっかり教えていくことが重要だと思う。】</p> <p>【SDは実施しないのか。職員間で格差はない方がよいと思う。】</p>	<p>「生成AIの活用事例から学ぶ」というテーマで、2023年度第4回教養教育授業方法研修会を令和5年12月18日(月)に対面とオンラインのハイブリッド形式で実施した。申込者数は137名であった。本研修会では3名の講師により、ChatGPT(生成AI)の最新の動向と事例、平和科目における「平和を考えるレポート」の評価指針と学生利用の実態、及び英語教育における生成AIの活用例と課題について講演があった。</p> <p>講演後、講師と参加者で生成AIと成績評価に関する意見交換を行い、今日の生成AIの普及と発展を踏まえ、授業内に演習・ディスカッションを取り入れる、あるいは批判的思考力を高める課題の設定など、これまでの評価基準を継続的に見直していくことが重要であることを確認した。また、今後、学生には自分自身で考え続けることで批判的思考力を養い、生成AIによる回答の真偽を見抜くことが求められるため、教員は教育方法と教育内容を継続的に改善し、教育のあり方を考え続ける必要があることを参加者間で共有した。</p> <p>上記研修には職員も参加し、生成AIの活用のメリット・デメリット、特性や最新情報等を習得した。また、外部講師を招へいし、職員向けのSD「Copilotとして理解する生成AI利用の基本」を令和6年3月4日(月)に対面とオンラインのハイブリッド形式で実施した。申込者数は222名であった。生成AIの利用にあたっての注意事項や業務利用の可能性についての講演及び具体的な活用方策の説明があり、参加者は生成AI(Copilot)を実際に体験したほか、質疑応答を通じて、文書作成や表計算等への生成AI活用の理解を深めた。</p>	教室 財務・総務室	第94回 (05.9.14)	(06.03.15報告)
3	<p>ノンディグリー・サーティフィケート・プログラムの体系的整理</p> <p>【ノンディグリー・サーティフィケート・プログラムの特徴は、大学のブランディングにある。大学のブランドとして何を打ち出していか整理する必要がある。】</p> <p>【最終的には、企業とのつながりが大事になってくる。企業との関係性を作っていくことが必要だと思う。プログラムだけを見るのではなく、プログラムのエクステンションに何かがあるかが大きいと思う。】</p> <p>【ノンディグリーをディグリーにつなげていくということも考えないといけない。】</p> <p>【若干バラバラ感があるため、統一的取組にしていってほしい。】</p>	<p>ノンディグリー・サーティフィケート・プログラムを大学のブランディングに活用していく方策として2つの方向性が考えられる。第1に、本学の基本理念の一つである平和を前面に打ち出していくことであり、2023年から8月6日に合わせて世界各国から学生を招いてピーススタディツアーを実施している。第2に、社会的課題解決のための最新のテーマを取り上げて教育内容のアップデートを図ることにより、本学の先端的な教育研究のブランディングを進めることである。</p> <p>将来的にはノンディグリー・サーティフィケート・プログラムを企業のエグゼクティブ教育や社員教育に活用していきたいと考えている。そのための基盤として本学ではスマートシティ共創コンソーシアムやひろしま好きじゃけんコンソーシアム等を設置しており、これらには多くの企業が参画している。</p> <p>ノンディグリーをディグリーにつなげていく好事例として、本学のスマートソサイエティ実践科学研究院の設置が挙げられる。国際環境リーダー育成特別教育プログラム(GELs)と、国際公務員育成特別教育プログラム(YPPCIG)は、同研究院における教育モジュールの重要な要素に発展して引き継がれており、今後ともこのように学位プログラムへとつながるノンディグリー・プログラムの発展に努めていきたい。</p> <p>ノンディグリー・サーティフィケート・プログラムを効果的に進めるためには、マイクロクレデンシャルの実現とデジタルバッジの活用が重要であり、今後とも学内の関係組織間が密接に連携していくことにより、大学として統一的な取組みとして進めていきたい。</p>	国際室	第95回 (05.11.22)	(06.03.15報告)